

「自分自身を愛するように」

マタイによる福音書 22 章 34～40 節

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

聖学院みどり幼稚園園長・チャプレン、聖学院教会牧師 赤田 直樹

「神を仰ぎ 人に仕う」。

この言葉は、私たちが学んでいる聖学院のスクールモットーで、チャペルニュースの左上にもこの言葉が書かれています。私たちは、この建学の精神のもとに、幼稚園から大学院まで、学び、生活しています。この言葉は、実は、イエスさまが言われた「最も重要な第一の掟」と、それと「同じように重要」な「第二」の掟から来ています。それは「あなたの神である主を愛しなさい」という掟と「隣人を自分のように愛しなさい」という掟です。

でも、よく考えてみると、この2つの掟には、「3つのこと」が言われていると思うのです。「神さまを愛する」ということと、「具体的に隣り合う人々を愛する」ということとの間に、「自分自身を愛する」ということが言われています。そして、「自分自身を愛する」ということは、とても大切なことだと最近よく思うのです。

今から2000年ほど昔、ある人が、イエスさまにこんな質問をしました。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか？」実はこの質問、とっても意地悪な質問です。何せ「律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた」質問なのですから。

ちなみに「律法」と「法律」は違います。漢字で書くと、「律法」というのは、「法律」をひっくり返しただけなので、似たようなものかなと思ってしまうのですが、全然違います。「法律」という言葉の由来はラテン語の「レックス」で、さらにさかのぼると「集める」とか「横たわる」という意味合いから来ているのだそうです。だから、「法律」という言葉には「人間同士の営みの中で横たわっている規範を集めたもの」というイメージがあります。

でも、「律法」の言葉の由来はヘブライ語で「トラー」で、「教え」という意味合いがあります。それ

は、人間同士の「教え」ではなくて、神さまからいただく「教え」です。私たちが、神さまの前に、人との間に、よく生きることができるようにと、神さまからいただいた「教え」が「律法」なのです。

もう少し言うと、「律法」には、広い意味合いと、狭い意味合いがあります。広い意味合いでの「律法」とは、旧約聖書の最初の 5 つの書物、「モーセ五書」と呼ばれる「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の全体を指して「律法」と言います。ただし、旧約聖書の最初の 5 つの書物の中に、神さまからの「教え」が、物語りの中に埋め込まれる仕方では書かれているので、分かりづらい、という点があります。そこで、「モーセ五書」の中から、神さまからの「教え」を抽出したものが、狭い意味合いでの「律法」と呼ばれます。

ちなみに、狭い意味合いでの「律法」の数はいくつあるかというと、「これをしなければならない」が 248、「これをしてはならない」が 365、合わせて 613 もの「教え」があるとされます。そんな 613 もの教えの中から、「最も重要」な「掟」を答えなさいって、「律法の専門家が、イエスを試そうとして」言うのですから、意地悪ですよ。

でも、この時、イエスさまは、言われたのです。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と。

イエスさまが言われた「最も重要な第一の掟」は、旧約聖書の「申命記」第 6 章 5 節「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という教えです。「同じように重要」な「第二」の掟は、旧約聖書の「レビ記」第 19 章 18 節「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という教えでした。そして、「律法全体と預言者」、つまり「聖書全体」は「この二つの掟に基づいている」、この二つの「教え」から 613 の教えが枝分かれしていて、この二つの「教え」こそが、聖書の核心を突く教えなのだ、とイエスさまは言われたのです。

私たち聖学院のスクールモットー「神を仰ぎ 人に仕う」は、この聖書の核心を突く教えから来ています。でも、最近、僕が気になっているのは、「神を仰ぎ 人に仕う」には、「自分自身を愛するように」という言葉が抜けている…ということなんですね。

実は、「神を愛する」「人を愛する」ということは、聖学院だけでなく、結構多くのキリスト教主義学校が、「標語」にしています。でも、どこも「自分自身を愛するように」という言葉を抜かしているのです。もしかしたら、一昔前は、「自分自身を愛する」なんて、当たり前だと思っていたので、スクールモットーに入れなかったのかも知れません。

でも、どうでしょうか。今の時代ほど、「自分自身を愛する」ということが、難しい時代は、ないのでは

ないでしょうか。若い方の意識調査を国際的に比較してみると、日本の若者は、外国の若者と比べて、「自己肯定感」が低い傾向にあると言われます。自分で自分のことを認めてあげられる、自分で自分に OK を出してあげられる感覚が低い傾向にあると言うのです。

何を隠そう、僕も、もともと自己肯定感がものすごく低かったのです。「できている自分じゃないと認めてもらえない」「素晴らしい自分じゃないと認めてもらえない」「誰かが理想とする姿に自分が合っていないと認めてもらえない」。そんなふうに思っていました。でも、そんなふうには生きられません。いつの間にか、「どうせ自分なんて」「自分になって価値がない」「こんな自分が生きていいんだろうか」そんな感覚を持っていたんです。

でも、今になって分かったのは、「こういう自分じゃないと認めてもらえない」と決めていたのは、他の誰でもない、自分自身だったのです。自分で自分のことを認めてあげられるとか、自分で自分に OK を出してあげられるという感覚は、本当はとっても大切な感覚です。

僕は以前、モラルハラ被害に遭ったことがあるのですが、「この人すごいマウント取って来るなあ」って思って、色々調べたら、当時まだ一般的に知られていなかった、「モラルハラスメント」という言葉に行き付いたのです。

実は、マウントを取ってくる人の心の奥底には、自分に対する無価値観、劣等感、欠乏感などがあります。自己愛の部分に問題を抱えている人は、自分を愛し受け入れる時に、条件付きになってしまいます。本当の意味で自分を愛し受け入れるということは、ダメな自分も、できない自分も、カッコ悪い自分も、きちんと受け入れるということです。ありのままの自分をきちんと受け入れて、そんな自分を愛する、大切にするというのが「**自分自身を愛する**」ということなのです。

でも、自己愛の部分に問題を抱えている人は、ダメな自分、できない自分を、絶対に認められなくて、できている自分、素晴らしい自分、理想の状態になった自分だけを愛することができるという状態になってしまいます。本当の自分を愛し受け入れられないので、その代わりに、他人から評価してもらったり、褒めてもらったり、相手よりも自分は優れているということをほのめかすことによって、自分を保とうとしてしまうのです。

「自己肯定感」とは、何も無い状態でも、自分は愛されていて価値があると感じられる力です。何もなくても、自分は愛されていて価値があるんだと思える人はマウントを取る必要はないのです。心の深い所で自分がダメだと思っているからこそ、マウントを取ることによって相手よりも上であることを誇示しようとして、結果的に人間関係に問題を抱えてしまうのです。

「**自分自身を愛するように隣人を愛しなさい**」。本当の意味で自分を愛する、ということができなけ

れば、本当の意味で隣人を愛することはできません。

一体どうして、神さまは、私たちがよく生きるための「最も重要な第一の掟」を、「あなたの神、主を愛しなさい」と言われたのでしょうか。それは、神さまの愛は、条件つきじゃないからです。

神さまが、私たちが愛してくださるのは、できている自分、素晴らしい自分、理想の状態になった自分だからじゃありません。神さまは、ダメな自分も、できない自分も、カッコ悪い自分も、ちゃんと受け止めてくださって、認めてくださって、愛して下さいます。

なぜならば、「私たちは神の作品」(聖書協会共同訳エフェソ 2:10)だからです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(新改訳 2017 イザヤ 43:4)と神さまは語ってくださいます。それだけではあまりせん。キリストは、私が生きるために、あなたが生きるために、十字架で命を棄ててくださったほどに、あなたを愛しておられるのです。

私たちは、「神さまを愛する」時にこそ、「神さまに愛されている自分」を知り、本当の意味で「自分自身を愛する」ことができるのです。「自分自身を愛する」ことができるようになるからこそ、「自分自身を愛するように隣人を愛」することができるのです。本当の意味で「自分自身を愛する」ことができないのに、「自分自身を愛するように隣人を愛」することなんて、できないですよ。

「神を仰ぎ 人に仕う」。聖学院のスクールモットーには、はっきりとは文字にはされていませんが、でも大学の「一人を愛し、一人を育む」という言葉には「自分自身を愛するように」ということが表されているのだと思います。

あなたは、神さまに愛されている、かけがえのない、大切な、価値ある存在です。だからあなたは、大丈夫。神さまに心を向けてゆく時、私たちはそんな自分を見つけ出すことができます。神さまを仰ぐことによって、神さまに愛されている自分を見出し、愛し、神さまの愛しておられる人に仕える一歩を踏み出してゆきましょう。

2024年6月28日 聖学院大学全学礼拝